知りたいことを見つけて、読みとったことを短くまとめる力を身につけよう。

「もうどう犬の訓練」を読んで、だいじな言葉や文を見つけ、書いてある内よりを短くまとめる力を身につける。

はたらく犬について知りたいことを、身につけた力を生かしていろいろな本やしりょうで調べる。

調べて分かったことを短くまとめて、「はたらく犬、もの知りカード」を作り、みんなで読みあう。

もうどう犬の訓練

吉原　順平　文

① 犬は、かしこく、活発で、人間となかよくなれる動物です。

② ペットとしてかわいがられる犬もいます。また、けいさつ犬などのように、人間のためにはたらく犬もいます。はたらく犬は、動物としての特長を生かしたり、おさえたりして、訓練された犬なのです。

③ もうどう犬も、はたらく犬のなかまです。もうどう犬は、目の不自由な人が、町を安全に歩けるように、目の代わりになって助ける犬です。

④ もうどう犬になるための訓練は、犬が一さいになると始まります。

⑤ さいしょは、人間の言うことにしたがう訓練です。

⑥ 訓練をする人は、「カム」（来い）、「ダウン」（ふせろ）、「シット」（すわれ）などのように、英語で命令を出します。犬は、命令の言葉を少しずつおぼえ、そのとおりにできるようになっていきます。

⑦ いちばんむずかしいのは、「ウエイト」（待て）の命令です。もともと活発な動物である犬にとって、次の命令があるまで動かないでいるのは、つらいことなのです。

⑧ しかし、たとえば、駅で電車を待つときに、もうどう犬が勝手に動くと、目の不自由な人がじこにあうかもしれません。ですから、もうどう犬は、がまん強くじっと待つことができなければなりません。

⑨ 次は、人を安全にみちびく訓練です。

⑩ この訓練が始まると、「ハーネス」という器具が犬の体にとりつけられます。つれている人がハーネスをにぎると、犬の動きがつたわってきます。

⑪ あぶないものの前で止まったり、それをよけて進んだりすることを、くりかえしくりかえし教えこまれます。たとえば、だんになっている所では、つまずいて転ばないように、かならず一度止まります。電柱があれば、つれている人がぶつからないように、上手によけるようにします。

⑫ 使っている人にとってきけんな命令には、したがわないことも教えられます。たとえば、自動車が走ってくる所で、わざと「ゴー」（進め）と命令し、命令どおりに進むと自動車とぶつかりそうになるという訓練をします。このような訓練をくりかえして、あぶないときは、「ゴー」と言われても、前へ進まないことをおぼえるのです。

⑬ 訓練を通して、もうどう犬にふさわしい心がまえも身につけていきます。

⑭ もうどう犬は、たくさんの人がいそがしく動き回っている町で仕事をします。そこでは、いろんなことに出会います。しかし、どんなことがあっても、おこったり、ほえたり、あばれたりしてはいけません。また、仕事中は、人にあ

まえたり、じゃれたり、おいしそうなにおいのする方に行こうとしたりしてはいけません。さらに、他の犬がほえても、気にしないこともひつようです。

⑮ こうした訓練は、約三か月から半年かかります。さらに仕上げの一か月は、実さいにもうどう犬を使う人といっしょに生活し、いっしょに町を歩く練習をします。

⑯ 訓練を終えて一人前になったもうどう犬は、八年から十年ぐらい、使う人とくらしてはたらきます。目の不自由な人にとって、もうどう犬は体の一部であり、心の通う家族なのです。

第一次（概観）指導の立案について

例題　**『もうどう犬の訓練』**

1〈区画〉について

・説明文の場合は、形式段落を区画とすることがある。すると、区画数が十以上になることがある。これでは、ポケットにしまって帰れる量を超えてしまう。

・区画は、指導の方針によって決まってくるものである。それで、二とく、六とくも視野に入れて決めることになる。特に、二とく「〇手引き」六とく「〇区分」との調整が必要になる。だから、仮の区画で案を立てることになる。

・そういう前提で、教式に沿って立案してみよう。

まず、全文を読む。（音読がよい）その時に、仮の区画線を入れる。

では、教式に沿って立案する。

①　「もうどう犬の訓練」を読んで、**二とく『〇題目』**を考える。

・これを「題を解く」といい、題名からどんなことが書いてあるかを探る糸口を掴むのである。さて、この題名の中にいくつの言葉があり、また、それらの言葉の相互の関係は何かを考えてほしい。

②　**「◎ひびき」**を考える。

・『ひびき』は、この話の生まれた元を考えること、筆者の吉原さんの動機を感じ取ることである。別な言葉で言えば「共感」したことと言ってもよい。そこには、読み手の感性が出てくる。そこを大事にするのが教式だと、私は考えている。それぞれに響いたことを書き出してほしい。

③ **「○手引き」**を考える。

・『手引き』は、話を一掴みにする（ポケットにしまって帰れる）手がかりになる言葉を選ぶ指針を与えるものである。すなわち、書き出された言葉によって、大体、どこにどんなことが書かれていてどんな話だと分かるものがよいのである。だから、一問での手引きがよいことになる。

物語文の場合には、主人公の「言・動」「時・空」「関わる事・物」「思・考」などが「手引き」に使われる。

さて、「もうどう犬の訓練」では、どんな手引きが考えられるでしょうか。

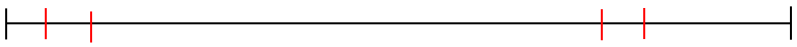
④ 四かく　手引きに従って書き出してみよう。

形式段落（キーワード）

1　動物（かしこく・活発・人間と…）
2　はたらく犬（訓練された犬）
3　助ける犬
4　訓練（一さい）
さい…　5　したがう訓練（人間のいうこと）
6　英語（命令）
7　ウエイト（むずかしい・つらい）
8　じっと待つ（じこ）
次は　9　みちびく訓練（安全に）
10　ハーネス（器具）
11　止まったり（上手に）
12　きけんな命令（進まない）
…通し…　13　心がまえ
14　仕事中（どんなこと）
こうし…　15　練習
…終え…　16　体の一部（心の通う家族）

赤い区画線は、最初と最後の区画位置が２通りありそう？

区画



⑤ 六とく**『○事実・区分』**を考える。

・『事実』は、手引きによって書かれた言葉の相互の関係をはっきりさせることである。書かれた言葉は、メモと考えるとよく、その区画を代表するものであり、他の区画と何らかの関係を示すものである。そこを明らかにするのが、事実の扱いである。すると、自然に区分ができてくる。大人は区分を先にしたくなるが、子供には難しいのである。それで、「事実」「区分」の順になっている。その逆ではない。

さて、四かくで書き出した言葉を元にどこから関連付けるか考えてみよう。

（四かくに書き込んでみよう）

⑥ **『◎山』**を考える。

・第一次指導六とく◎山は、第二次指導で詳しく読む所を決める活動である。○事実・区分で、どんな話かを概観したので、どこを詳しく読むとよく分かるか、また、面白いところはどこかなど、深く読み進めるところをはっきりさせ、期待をもたせる活動が『山』の扱いである。

さて、第二次指導は、何時間扱いでどこにするかを考えてみましょう。

⑦ 『○余韻』を考える。

・六とくの最後は、「余韻」になっている。余韻は、授業の最後にあるのではなく、一時間の中の随所にあり、また、単元全体の中にもあるのである。あえて、子供に答えさせるものでもない。子供の中に、あるイメージができ、その世界を楽しんでいる状態である映画・演劇・コンサート等々での余韻を愉しむ、それを他と交流しない方がよいときもある。余韻とは、不思議なものである。

私は、そんな風に考えている。

芦田先生は、子供の目の輝きでそれがわかるとおっしゃっている。